第２回双葉町放射線量等検証委員会　議事要旨

日　時：令和元年６月５日（水）　13：30～15：10
場　所：双葉町役場いわき事務所　２階大会議室

１　開会　（略）
２　議事
（１）解体・除染工事の進め方について
● 資料２に基づき、環境省から説明。
（主な意見）
➢ 事後モニタリングやフォローアップについては、2021 年度ではなく工事の進捗に合わせて、適宜実施することを検討してほしい。

（２）放射線防護策に関する取組について
● 資料３及び資料４に基づき、内閣府から説明。
（主な意見）
➢ バリケードを設置する目的は、元々は過剰な放射線被ばく防ぐことなので、結果的な防犯対策とは分けて議論する必要がある。
➢ 帰還困難区域の中でも、線量的に問題がなければ立入は自由にする等の柔軟な対応が必要である。
➢ 多くの町民に帰還してもらうために、除染など放射線量の低減化も環境整備のひとつとして、どのように整えていくかが大事である。
➢ 2020 年には居住を目的にはしない避難指示解除ということだが、対外的なアピールとしてはどのように進めていくのか。
→産業交流センターやアーカイブ拠点施設も整備されることから、集客・誘客をアピールしていく。
➢ 実際の被ばく線量を測定すれば年間 20 ミリシーベルトを超えるようなところはない。
➢ 放射線防護上の問題として、特定復興再生拠点や避難指示解除準備区域以外のエリアについてもどのようにしていくかは忘れてはならない問題である。解除以外のところの実際の放射線の被ばく線量は発信していく必要がある。その上で一人ひとりに判断してもらうことが重要である。

- 放射線の被ばく線量については、計算の値よりも実測が一番いいと考える。モデルケースとして先行的に町へ入る方にDシャトルをつけて生活してもらい、データを収集し、住民に発信してはどうか。
- 農作物等の測定サービス等ができるような体制を検討していくことが大事である。

（３）放射線等に関するリスクコミュニケーションについて

- 資料５に基づき、事務局から説明。

（主な意見）

- リスクコミュニケーションの中で、放射線の不安、懸念、健康上の問題等についての話ができる。
- 放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターを活用し、その活動を広げていく必要がある。
- フェーズが変わってきているので、住民に寄り添った取組が必要である。
- 小さな座談会や車座のようなリスコミの場で、その場で不安なことを相談して、すぐ回答できることにより、自分の生活に密着していることなので参加者の理解の吸収もよい。
- リスコミの中でいろいろな話を聞いて、そのあとに客観的なデータで説明し、最終的には本人が判断することになるが、コミュニケーションが必要である。
- 信頼できるリスクコミュニケーターの条件の一つは、価値観が共有できるということなので、その点から同じ町民になってもらうことが理想だと思う。
- シーベルトやベクレルの違いが分からない学生もいるので、学校教育から始める必要がある。
- 数字だけが独り歩きしている部分があるので、実際の線量や被ばく量等の相場観を知ってもらう必要がある。

３　その他（略）

４　閉会（略）